The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『法華宗要』の成立について

金　炳坤

1．はじめに

『十門和諍論』に象徴される元暁（617–686）の和諍思想が顧みられ，彼に和諍国師の諡号が贈られるようになったのは，死後もしばらく400余年が経つ高麗の粛宗6年（1101）のことである．それからのこと，我々は立場を異にする諸説に対して調和を図ろうとした彼の根本思想を，新訳とその解釈の相違によって生じた教義上の諸問題に対して分析・批判し，融和・会通することに努めていた彼の思惟方法を和諍という言葉で表している．

ことに，彼によって意図されたところの『法華宗要』における和諍とは，皆有仏性説（一切皆成仏）と五姓各別説（一分不成仏）とを和諍の対象にして，このような両極化の様子を帯びていた当時の仏教界を同帰本原（同帰一乗）に立脚して和諍せんとしたことがその目的であったことは，すでに拙稿において指摘したとおりである[1]．したがって本稿では，『法華宗要』における和諍の構造について，それが最も顕著に現れている第五明教摂門に焦点を絞って具体的にこれをみていくとともに，『法華宗要』の著述年時についても検討を加えることにする．

2．和諍ということ

元暁は『法華宗要』の第五明教摂門において，始めに『解深密経』『彼論』（『瑜伽師地論』か）に基づいて『解深密経』を究竟真実の了義（第三）と，対して『法華経』の「方便品」に基づいて『法華経』を不了義（第二）とする初師の三転法輪説（第一有相・第二無相＝不了義，第三無相無上＝真了義）を紹介し，自ら初師の説の裏付けの根拠として『解深密経』『大乗阿毘達磨雑集論』（以下，『雑集論』）『法華経』の「信解品」と経証・論証の2種の明証を挙げ，初師の説を是認する．

次いで『法華経』を究竟の了義（第三）とする後師の説，すなわち吉蔵（549–623）の『法華遊意』における三種法輪説[2]（第一根本・第二枝末・第三摂末帰本）を紹介し，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

これをも是認する．

そして和諍の第1段階として，了義なる両説の不了義とするところ，すなわち初師の第二無相法輪（『解深密経』『雑集論』の一切乗の立場からみた密意・方便たる法華の一乗）と吉蔵の第二枝末法輪（法華一仏乗において分別して説かれた三乗の教え）とに着目して，これらは一の見地において三と説くものであるから，みな方便にして不了義の説であるとし，このように真実たる了義のなかには方便たる不了義が含まれているという観点から，両説において不了義とされたところさえもこのような立場からすれば了義にほかならないということを明証するために，経証として『法華経』の「安楽行品」「化城喩品」並びに『勝鬘経』を，論証として『法華論』『大智度論』『宝性論』を挙げて両説を是認する．

そのうえ和諍の第1段階をまとめて，二乗・無性有情等の不成仏を説く諸教は方便の不了義の説であって，もし一乗を説くのであれば，一乗のほかに第二，もしくは両説において不了義とされたところの第二のような便宜的な区分・差別はあってはならず，例外を設けずして一切衆生のみな当に作仏すべきことを説く経典こそが真の了義であるとして，一乗を説くための方便もなお一乗の真実であるという自らの立場を明確に示している．

さらに和諍の第2段階として三番問答を設けて，第一問答では，もし初師の義が正論であるとすれば，吉蔵の所引の文とはどのようにして和会されるかという問いに対して，吉蔵のいう一乗教の所説の諸文は，みな彼の不定性を護らんがための方便であるから，方便教が述べられているという点で，両説に相違があるわけではなく，また『法華論』『宝性論』『大智度論』にもそのように説かれていると答える．

第二問答では，もし吉蔵の義が正論であるとすれば，初師の所引の証とはどのようにして通ずるをうるかという問いに対して，『解深密経』の説は一向趣寂のために説かれたもので，不定種姓のために説かれたものではないことは『瑜伽師地論』からも明らかであるとし，ゆえにこれもまた方便であって相違せずとする．また『対法論』（典拠不明，Abhidharma の総称，または『摂大乗論釈』か）の文は，三乗権教の意を述べたもので，究竟真実の道理にあらずとして，『仏地経論』からもこれが方便教の文であることは明らかであると答える．

そして第三問答では，和諍の第2段階のまとめとして，両説のいずれが実か，いずれが勝かという問いに対して，これらはみな経論であるために不実なることはないが，一向趣寂の者の意を護らんとせば，初師の説が実であるし，不定種姓

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の人の意を護らんとせば，吉蔵の説が実であるとする．また両説の勝負を判じて，初師の義は狭・短なるし，吉蔵の義は寛・長なるとして，短狭の義で寛長の文を会するは，文傷れ義[3]会し難いが，寛長の義に短狭の文を容れるは，文狭なるがゆえに義傷れることなく会し易しとして，吉蔵の説が勝であると答え，結して元暁は吉蔵と同様に『法華経』を究竟の了義の教であると位置づけている．

最後に和諍の第3段階では「諸の了義，究竟の教の内に，方便，不了の言無きに不らず」ということを基調に，『解深密経』のなかにも真の了義および方便の不了義の説という二文が併存しており，『法華経』のなかにも「化城喩品」に「息処の為めの故に，宝城を化作して，更に止息し已われば，終に仏果を引く」とあるのは究竟の了義であり，「方便品」に「唯だ，一乗有るのみにして，二無く三無きなり」とあるのは不了義の語であるが，「方便品」の文は「不定性の者を護らんが為めに，趣寂二乗の行無しと説くも，而も実には趣寂二乗の行無きに不らず」といって真実に従属された方便の語，つまりは真実が説かれているため『法華経』に方便の語はなく，『対法論』も同様であるという結論に達している．

以上が『法華宗要』の第五明教摂門における和諍の構造であり，方便を内包した一乗の真實が説かれているという点で，『法華経』も『対法論』も了義であるというのが元暁の『法華宗要』における趣旨と解される．

3．『法華経』を不了義とする初師とは誰か

先述したように『法華経』を第三法輪の了義とする後師の三種法輪説は，その引用文例の一致することから吉蔵の『法華遊意』に基づいていることが明らかなるが，一方で『法華経』を「第二の無相法輪の所摂なり．既に第二に属すれば，是れ不了義なり」（T. 34 p. 874c）とする初師の三転法輪説については，いったい何人の説たるやこれを知るすべがない．

というのは，従来の指摘[4]のとおり，真諦（499–569）はもちろん，玄奘（602–664）をはじめ，その門弟の円測（613–693）や基（632–682）までもが『法華経』を第三法輪の了義に配当していたことが知られているからである．それでは元暁のいう初師とは果たして誰のことを指すのであろうか．

この問題については管見の及ぶ限り，慧沼（648–714）の『法華玄賛義決』（690年頃・後師の説の典拠とする）『成唯識論了義燈』（695年以降・以下，『了義燈』）によるものであるとする塩田義遜博士の説[5]（以下，塩田説）と，法蔵（643–713）の『華厳経探玄記』（695年・以下，『探玄記』）『華厳一乗教義分斉章』（670年頃・以下，『五

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

教章』）の記述から「玄奘の説と見て間違いない」とする徐輔鉄氏の説[6]（以下，徐説）とが呈されているため，以下にこれらを検証してみたい．

まず，塩田説は『了義燈』に「彼の執を破して，彼の乗を破せず，故に通じて三の為めなり．若し爾らば法華には，既に亦た乗を破すと云う．応に第二時なるべし」（T. 43 p. 660c）とある一文を挙げ，続けて「且つ華厳勝鬘を頓教，般若法華を漸教と判ずる文に依て，元暁は法華を般若と同じく第二の空教と判じ，非究竟了義説となしたるものであらう」と推定している．

確かに『法華経』を第二時とみなした『了義燈』のこの一文は注目に値するといえようが，文脈の意味するところがはっきりとしないこの一文だけでは論拠としての決め手を欠いているし，また「般若法華を漸教と判ずる文」と指摘したところの『了義燈』における文意とは，そう説いてはならないという意趣であるため，論拠にはなりえない．それに「元暁は…と判じ…」という文面に至っては，あたかも元暁が初師の説を整合したかのような捉え方になっているが，ここで看過してはならないのは，あくまでも元暁は和諍のために「有るが説かく」に始まる特定の人物の説を紹介しているにすぎないということである．

また，後師の説についても吉蔵ではなく，慧沼の『法華玄贊義決』（T. 34 p. 859b）によるものであるとするが，これは『法華宗要』に「此の中の初め（初師の三転法輪説）と，後（後師の三種法輪説）の二教は，同じく是れ究竟の了義の説なり．第二の教（初師の第二無相法輪・後師の第二枝末法輪）は，一に於いて三と説く．皆な是れ方便にして，不了義の説なり」（T. 34 p. 875a）とある記述のなかの「第二の教」を後師の三種法輪説と解したことによる誤認である．

さらに『唐故白馬寺主翻訳恵沼神塔碑』によれば「咸亨三年（672），長安の基・光二師の福智七徳を服膺す．…二師歎じて曰わく，法門の後進此の一人なり．…少くして此れより伝授すること廿余年．又た能断般若・金光明□・盂蘭盆・温室等の経疏，恵日論・了義燈等凡そ六十巻を撰し，翻する所の経律論等三百余軸，盛んに代に行わる」（SZ. 88 p. 383c）と慧沼は基・普光に師事してなお20余年が経つ690年代に入ってからその著述活動の盛んだったことが知られている[7]．

しかしこのとき元暁はすでに没していたため，慧沼に影響を受けたとは考えにくく，しかも慧沼は『了義燈』において，元暁の現存する22部の著述のうち，唯一その著述年時が知られている『判比量論』（671年）に対して，批判を行っていたことが指摘[8]されているため，むしろ批判のためとはいえ，先学の元暁を意識していたことが窺われる．なお，このことからわずか20年足らずの短い間

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

に元暁の『判比量論』が唐に伝来していたことが窺われる．

次に徐説は，法蔵の『探玄記』における一乗三乗の権実論のなかで，玄奘の三転法輪説を受けて三乗実を主張する「或は有るが説かく」に始まる一説に「法華は既に第二時の教に当たる．即ち是れ密意の権説なり」（T. 35 p. 113c）とあることと，また『五教章』において玄奘の三種教が述べられているところに「二には照法輪と名づく．謂わく，中時に大乗の内に於いて，密意を以て説きて，諸法空と言う等なり」（T. 45 p. 481a）とあることとを結び付けて，両説に「密意」という用語が符合することから直ちにこれを玄奘の説とみなし，元暁の引く初師を玄奘と推定したものであるが，先述したように玄奘は『法華経』を第二時には配当しておらず，内容からしても五姓各別説を擁護する人師の説であることは確かであるが，初師の説に帰結せしめるような根拠は見当たらないため，初師でもない別人の説であると考えられる．

しかしながら『探玄記』を読み進めていくと，続く一乗三乗の種類を論ずるなかで，先に『法華経』を第二時に配当した人師の説と同様の説（T. 35 p. 114bc）が見られ，また表員（8世紀中頃）の『華厳経文義要決問答』には『探玄記』の本箇所を省略引用し，最後に「上来，法蔵師の述，懍師の『法鏡論』に説くが如し」（SZ. 8 p. 436a）と典拠を明かしているため，『探玄記』において『法華経』を第二時に配当した人師とは，懍師である可能性がある．

以上，初師を慧沼とする塩田説と，初師を玄奘とする徐説とを検証し，両説の不適切なることを立証した．しかし依然として初師が誰かということについては答えをえていない．

初師のように『法華経』を第二法輪（無相・不了義）に配当する三転法輪説については，残念ながら不明とせねばならないが，おそらく玄奘訳『解深密経』を拠り所にしながら，円測や基とは別なる考え方を持っていて，しかも『法華経』に対して批判的な人物であったことが想定される．また，玄奘に学びかつ元暁とほぼ同時代の人物であるとすれば，新羅出身の神昉・智仁，または，玄奘亡き後の六家[9]のうち，円測・基を除いた普光・恵観・玄範・義寂の4人のいずれかである可能性もあるが，確定することはできない[10]．

4. むすびにかえて

本稿では，元暁の『法華宗要』における和諍の構造について，第五明教摂門を中心に考察し，これを明らかにした．また，その過程において問題となった初師

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の三転法輪説に対する従来の学説を検証し，これらの不備を是正したのである．

とくに『法華宗要』の著述年時については，前掲の拙稿において指摘したように，『法華宗要』における『大悲経』の引用文例が『大悲経』からの直接引用ではなく，同じく元暁の著述である『本業経疏』と，道世の『法苑珠林』(668年)とに一致することから668年という基準を設けているが，今後，元暁の法蔵や慧沼に及ぼした影響とも考えあわせて再考する余地がある．なお，元暁の現存する著述22部の著述年時についても前掲の拙稿を参照されたい．

1）拙稿［2011］「元暁『法華宗要』訳注（2）」（『仏教学論集』28，pp. 38–42）参照．
2）三種法輪に類似することが指摘〔米森俊輔［2003］「達法師の三時経教と法朗の三種教判と吉蔵の三種法輪」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』25，pp. 54–69）〕されている法朗（507–581）の三種教判（第一根本・第二方便・第三帰宗）では，『法華経』は第二に配当される．なお，法朗の三種教判を伝えたとされる慧均（7世紀前半）の『大乗四論玄義記』の現行テキスト〔崔鈗植［2009］『校勘　大乗四論玄義記』（佛光出版社，ソウル）〕からは両説とも見当たらない．　3）本文中に傍点を付した字は，仁和寺蔵本をもとに補填・訂正した箇所を表す．　4）吉村誠［2005］「唯識学派の三転法輪説について」（『駒澤大学仏教学部論集』36，pp. 163–194）参照．　5）塩田義遜［1960］『法華教学史の研究』（地方書院，東京，pp. 334–337）参照．　6）徐輔鉄［1985］「法華宗要における元暁の和諍思想」（『駒澤大学仏教学部論集』16，pp. 359–363）参照．　7）詳しくは，根無一力［1987］「慧沼の研究　伝記・著作をめぐる諸問題」（『仏教学研究』43，pp. 181–187）参照．　8）福士慈稔［2004］『新羅元暁研究』（大東出版社，東京，pp. 212–213）参照．　9）善珠『唯識義燈増明記』（T. 65 p. 342a）参照．　10）吉村誠博士より学会翌日付のお便りを頂戴し，小野嶋祥雄［2010］「初唐期における三一権実論の再検討」（『龍谷大学仏教学研究室年報』15，p. 12）に，安然の『教時諍論』の中に玄奘門下の神泰が『法華経』を第二時に配当していたという記事があるとのご教示を戴いた．記して深く感謝申し上げるとともに今後の課題とさせて戴きたい．

〈キーワード〉　和諍，五姓各別，三種法輪，三転法輪，吉蔵，慧沼，法蔵

（立正大学大学院）

NII-Electronic Library Service